
ほんとうのころ

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほんとうのこころ

【Nコード】

N6235Z

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

「新一なんか…大嫌い！！！」

私が言ったこの言葉で新一との関係が崩れてしまう…

新一、私は今でも、あなたのことが大好きです…

「もう顔も見たくないんじゃないの？」

新一カラ告げられたこの言葉。ー新一のばか

「新一は、山城さんのほうが好きなんでしょ？」「俺は・・・」「工藤君、あなた、変な意地張ってんじゃないわよ！」「元の蘭を帰してよ！」「私は…工藤君とは無関係よ、ただ、あなたがかわる問

題じゃないの……！」「私と工藤君は恋愛関係じゃ……」

「うそよお！」

はたして、新一と蘭の恋の結末は！？

喧嘩

「新一のばか…」

蘭は半泣きでいつもの帰り道を歩いていた。

新一と蘭が付き合って二カ月がすぎる。

いまだに喧嘩はあるようだが、蘭が泣くまでひどいことはなかった。それは、一時間ほど前のことだった。

「おい、ら・・・」

新一と蘭は違うクラス。

蘭はA組。新一はB組。

新一が彼女の蘭を呼びに行こうとした時、同じクラスにいた、新一と肩を並べるほどのイケメンで優しい男子と蘭が仲良く話していたのを新一は見てしまった。

その男子は蘭と話している時だけうれしそうに顔を赤くしているのだ。

「へえ・・・すごいね!」

「あ、そうだ、今度行こうよ!そのサーカス!日曜日にさ!」

「あ、日曜はだめ。新一と…」

「いいってそんなの！」

「でも…」

「いいからいい・・・か・・・ら・・・！！！！！」

その男子がふと、ドアのほうを見ると、新一がものすごい剣幕で男子を見蘭でいた。

「あ、新一！」

「よう、蘭。何の話してたんだあ？」

何か意味ありげな顔をして蘭に聞く。

「なんか、サーカス行かないかなくて。」

「断ったんだろうな？」

「うん…」

蘭は何か不安げな顔をする。

「どうした？」

「空手が…」

「あ、もしかして、大会なんか？」

「うん…近いから、合宿しないかって。」

蘭は心配そうな悲しそうな顔をした。

新一が起こるであろっ、そう思っただ。

「なんだ、そうだったのか。実は、俺も用事があつたんだ。」

「え…？」

「工藤君！」

「あ、山城。」

山城優未が蘭の目の前に現れた。優実は、ツインテールで美少女である。

「山城さん…。」

「工藤君、日曜のこと、忘れないでよ！？なっただ、あれは…」

「シッ！」

新一が急いで優実の口をふさぐ。蘭はそれを不審に思った。

「新一…山城さんと行くんだ。ふうん…デート？」

「あ、違うって…。」

「そうよね、なんなら、別れようよ。私なんかより、山城さんのほうがいいんじゃない？」

蘭はうつむきながら言った。

新一はあわてていたがどうしようもできなかった。

「蘭…違うって…！」

「新一のばかぁッ！！」

新一なんか…新一なんか…大嫌い！！！！！！！！！！」

蘭はそういふなり、走って学校を出て行ってしまった。

自分の心

日曜日、私は自分の部屋で泣いていた。

新一とは別れた・・・っていうの？

本当は本当は、別れたくなんかない、嫌いじゃない。

大好きでずっと一緒にいたい。

でも、新一は…山城さんと今日、デート。

2人でどこに行くんだろう…

映画？

ショッピング？

公園？

それとも、

私と新一がよく行った、トロピカルランド？

ああ、トロピカルランド…1人でもいい。行ってみたい。
久しぶりに…。

新一は、私ではなく、山城さんを選んだ。

まあ、当たり前。私なんかより、可愛げがあって、女の子らしくて、空手をやっている野蛮な私なんかよりも、すっごく可愛い。私は、ブサイクで優しくないかない。
いつも新一のせいばかりして。

だから新一も飽きちゃったんだよね？

私がばかだから…

私は不細工だから…

私がいけないから…

「おい、蘭！」

お父さんの声…。

「探偵坊主が来たぞ〜！」

探偵…坊主…？

新一……！！！！

私は急いで行こうとした。でも、急に足が止まった。

怖い……

新一にあんなこと言って……

どうせ、別れよう、とでも言っただけでしょう？

私はそのまま部屋から出ようとは思わなかった。

「帰って！」

私はそう叫んだ。

「毛利さん！」

山城さん…のこえ。

やっぱりいたんだ。

「おい、探偵坊主、そいつは誰だ！？」

「はい、山城優実です！工藤君の友達というか、彼女というか？」

「ちがうだろ。」

「はあ？おまえの彼女は蘭だろうか！？」

「あ、そのことで…」

え…

やっぱり別れようって…

新一のばか…

私、恥ずかしいじゃない。

あんなに、あんなに、新一と一緒にいたことが…。

「帰ってよ！もう…かもみたくない！！！！！」

あ、いっちゃった。

どうしよう…

私は急いでドアを開けて、玄関へ向かった。

そこには、新一と山城さんが帰ろうとしていた。

「ま、待って…！！！」

私は二人を追いかけた。

2人は振り向く。

「ごめんなさ…」

「顔も見たくないんじゃないの？」

し、新――？

「お前、俺のこと嫌いなら……」

別れるか？」

自分の心（後書き）

新一…！

とうとういってしまった！？

家族関係

「新一？」

「蘭、おまえは俺と別れたいのか？」

「そんなことない！ただ…イラついてたの…ゴメンナサイ…」
「どうして？どうしてここまで私が苦しい思いを？」

「新一じゃないみたい…」。

「いや、別にいいんだ。」

「新一、山城さんとどこへ？」

「どこだっついていいだろ？」

「何よ…それ…」

「蘭には関係…」

「あるわよ！新一、新一のほうこそ、私と別れたいんでしょ！？なんなら、」

「別れてあげようじゃない！じゃあね、新一！」

「バカ…何言ってるのよ…」

「おい、蘭！」

新一が私を呼んでる…

でも、私は振り返ることができなかった。

いや、しようと思わなかった。

「毛利さん！待って！話があるの！」

どうせ、新一をくださいと言っても言っただけでしょ？

いいわよ…別に…？

「何？話つて。」

「毛利さん、私、工藤君とは恋愛関係じゃ…」

「嘘よ！！」

「毛利さん…？」

「私がこんな思いをしてるのは…山城さんがいたから…っ！」

「毛利さん、そのことはゴメンナサイ…！でも…私は工藤君とは無関係です…いや、家族関係ですね…。」

「家族関係？」

「そうです。だから…私は…工藤君のことは好きじゃないです

！！」

「本当…？」

「そうです！！」

ほっとした…

でも、どうしよう、これから…

どうせ、新一は怒ってる。

ごめんね、新一。

「毛利さん、私、応援しますよ？私、一応、毛利さんファンですから！」

「ありがとう…」

私は泣いていた。ごめんね、新一。

私は急いで、志保にメールした。

『T O 志保

いきなりごめん。

じつは、今さつき新一と別れてしまったの。原因は私。どうしたらいいと思う？

園子にもメールしとく。志保の意見聴かせて…！』

こう打つとすぐに送信した。

そして、数分すると、返信が来た。

『T O 蘭

はあ？工藤君と別れた？

どうして？まあ、それは工藤君に聞くわね。

工藤君はA P T X 4 8 6 9で脅せばスラスラとはいってくれるわ。』

アハハ・・・志保らしいな…

よおし次は園子！

『T O 園子

今さっき、新一と別れちゃった。どうしたらいい？

原因は私なの。「顔も見たくない」っていったら、なんだか、新一めちゃくちゃ怒って謝ったら、新一、こそこそと山城さんと出かけようとしたの。でも、山城さんは新一のこと好きじゃないって。

新一は：山城さんとは家族関係らしいの。何のこと話してたかわからないけど、でもでも、私は新一のこと好き。どうしたらいいとおもう！？』

送信送信つと。

数分後、

『ＴＯ蘭

はあああああああ！？新一君と別れたあ！？

ぬぁにやってんのよ！あんたたち、付き合って約二カ月じゃない！わかったわ、新一君に問い詰めるわね！志保と共同で！蘭、あんまり凹まないでね！』

園子…

いい親友を持ったなあ…今頃だけど。

でも、ありがとう、２人とも。

家族関係（後書き）

どうなるの！？2人い！
感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6235z/>

ほんとうのころ

2011年12月21日20時54分発行